

国際学校保健セミナー 2008' からの学生の学びと 「健康観察 / 救急処置」研修における研修員の学び 独立行政法人国際協力機構 (JICA) 平成20年度集団型研修「学校保健」から

藤井千恵

養護教育講座

University Students' Learning from the International School Health Seminar 2008' and Foreign Participants' Learning from the Training of "Health Observation / Emergency Care"

Chie FUJII

Department of School Nursing and Health Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

独立行政法人国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency: JICA) では、途上国の研修員が日本の学校保健制度や学校における取り組みを理解し、自国の学校保健システム改善に資する政策・制度に係わる示唆を得て、自国内の関係者に普及させることを目的として集団型研修「学校保健」コースを平成18年度から全5回の予定で実施している。平成20年度はその3回目であり、本邦における研修期間は平成20年5月18日～平成20年7月5日、12ヶ国 (エジプト、コートジボアール、ガーナ、ニジェール、カメルーン、ケニア、タンザニア、ザンビア、南アフリカ、ネパール、ラオス、ツバル) で15人の研修員を受け入れた。

愛知教育大学養護教育講座としては、1回目から毎年途上国の研修員が自国の学校保健の現状を報告するジョブ&インセプション・レポート発表会 (国際学校保健セミナー) に途上国における学校保健分野の現状を理解することを実習目標に、臨床実習の一環として養護教諭養成課程第3学年の学生を参加させている。そこで今回、各学生の実習記録から学生の学びをまとめて国際学校保健セミナーに参加することの意義について検討した。

また、筆者が集団型研修「学校保健」のなかで担当している「健康観察 / 救急処置」研修を平成20年度は、本学養護教育棟で実施し、研修のプログラムに学部学生の授業の見学を新たに組み入れた。そこで、研修員の学びおよび感想と学生の感想から今回の取り組みの意義を抽出し、今後の研修の課題について検討したので報告する。

方法

1. 国際学校保健セミナー2008' からの学生の学び

平成20年5月31日にあいち小児保健医療総合センターにおいて、研修員が自国の学校保健の現状等を報告する国際学校保健セミナー 2008' が開催された。その発表会に参加した学生の実習記録からどのようなことを学習したかを抽出してまとめた。

2. 「健康観察 / 救急処置」研修における研修員の学び

平成20年7月1日に愛知教育大学において、JICA 学校保健コース「健康観察 / 救急処置」研修を実施した。参加した研修員のコメント記録からどのような授業の内容が参考になったか等を抽出してまとめた。また、学生の感想から研修員が授業を見学することに対して学生がどのように感じたかを抽出してまとめた。

結果

1. 国際学校保健セミナー2008' の概要と学生の学び

国際学校保健セミナー (図1, 図2) における研修員のジョブ&インセプション・レポートの項目は、1. 所属組織, 2. 現在の職位・職務・職務経験, 3. 国全体の学校保健関連指針・関係部署, 4. 対象地域の保健教育・学校環境管理・健康管理・学校保健を推進する上で問題となること, 5. 本研修に期待すること等であった (表1)。研修員の自国での立場は、保健省あるいは教育省で学校保健に関係した部署に所属している事務官、医師、保健師、栄養士等であった。

学生の実習記録から抽出した学びは、以下の通りであった。

表1 研修員のレポートの項目

1. 所属組織
2. 現在の職位・職務・職務経験
3. 国全体
 - 1) 学校保健の指針
 - 2) 学校保健に関わる部署
4. 対象地域
 - 1) 保健教育
 - (1) 小学校での学習科目
 - (2) 保健について学習する科目
 - (3) 保健学習の内容
 - (4) 学内外で行う保健学習の行事
 - (5) 保健学習の指導者
 - (6) 保健学習の教材
(政府、国際機関、自主作成)
 - (7) 保健教育に関する研修、その内容
 - 2) 学校環境管理
 - (1) 校内の保健関連施設、備品
(水飲み場、トイレ、照明、健康管理室、在庫薬品、その他)
 - (2) 環境衛生活動
(ゴミ集め、清掃、緑化、その他)
 - 3) 健康管理
 - (1) 児童の出欠、健康状況
 - (2) 予防接種
 - (3) 健康診断
 - (4) 感染症予防
 - (5) 給食
 - 4) 学校保健を推進する上で問題となること
(社会、宗教、文化、人種、組織等)

5. 本研修に期待すること

- ・ 日本では、今ではほとんど耳にしなくなった感染症も予防接種や医療、衛生面が整っていない途上国では大きな健康問題になっていることを知った。
- ・ 学校に水道がなく、雨水や井戸水で生活している国がほとんどであり、清潔な水が確保できなければ感染のリスクが高くなるので、それらの水を清潔に使うことが出来るような方法を考えたいと思った。
- ・ 国による衛生状態等の差もあるが、同じ国の中でも地域差が顕著であると感じた。
- ・ HIV/AIDS, 学校給食, 安全な水の確保, トイレ・ゴミ捨て場等の環境衛生の問題の解決に向けて学校保健の導入が重要であると改めて実感した。
- ・ 養護教諭のような専門的な教員を配置することは難しいかも知れないが、児童生徒の継続的な健康管理を行い、常に健康状態や栄養状態を把握し、感染症の早期発見、予防教育に努めるべきだと思った。
- ・ 宗教の関係で学校保健の考えが浸透しない問題については、想像外であり、その問題は単に知識提供だけでは解決できないと感じた。
- ・ 研修員のみなさんは、国の政策への影響力がある方だと思うので、学校現場の現状をしっかりと把握してよりよい学校保健の施策を推進して欲しい



図1 国際学校保健セミナー2008'

- と思った。
- ・ いろいろな国がお互いの国の現状を知り、それに対する取り組みをお互いに学び、共に衛生状態の改善や人々の健康レベルの向上を目指せるような環境は、とても重要であると思った。
 - ・ 途上国の政府も環境衛生の改善に取り組んでいるが、日本もその取り組みに協力して、世界全体で環境衛生の改善を図っていくべきだと思った。
 - ・ 日本が学校保健の制度を確立できた歴史を途上国に発信していけたらと思った。
 - ・ いかにも子どもが健康で安全に教育を受けられるか、それがどれだけ大切であるか考え直す機会になった。
 - ・ 国民の命や健康に関わってくる学校保健の重要性を改めて感じ、広い視野で考えることができて今回のセミナーは充実していた。
 - ・ 日本だけではなく、各国の様子や現状など世界にも目を向けた学びをすることは、教育者を目指す者にとって大切であると思った。養護教諭を目指してこれからも勉学に励みたいと感じた。
 - ・ 今の日本の環境は、とても恵まれており、感謝すべきだと感じ、私たちは一体何をすべきなのか、自分たちの課題は何なのかを考えることが出来た。



図2 国際学校保健セミナー2008' 記念撮影

- ・途上国の人々の現状を知り，広い視野を持って児童生徒に接する方が，より子どもたちに生きることの意味や素晴らしさ，命の大切さを伝えることに重みが出ると思った。

2. 「健康観察/救急処置」研修の概要と研修員の学び

JICA 学校保健コース「健康観察/救急処置」研修では，はじめに学部学生の授業（看護実習Ⅰ，学校保健演習，保健統計，微生物学実習）の見学を実施してから1.ヘルスプロモーション，2.健康観察，3.標準予防策，4.救急処置，5.その他の講義と演習を実施した（表2，表3）。

表2 「健康観察/救急処置」研修プログラム

13:00～13:10	オリエンテーション Orientation
13:10～13:30	看護実習Ⅰの見学 Practical Training in Nursing (養護活動実習室の見学) (Practical Training in School Nursing and Health Education)
13:30～13:50	学校保健演習の見学 Seminar in School Health
13:50～14:10	保健統計の見学 Health Statistics
14:10～14:30	微生物学実習の見学 Practical Training in Microbiology
14:30～16:00	健康観察 / 救急処置の講義・演習 Health Observation / Emergency Care

参加した研修員のコメント記録から抽出した参考になった授業（図3，図4）の内容は，以下の通りであった。

- ・私の国では，十分な教材や道具はないが，学生たちは，最先端の道具を用いて演習・実習を行っていた。
- ・学生たちは，実践的能力を身に付けて卒業することができる。これは，学校において効果的なサービスを提供することにつながっている。
- ・どの教科もとても役立つものであった。
- ・実践的な実習にとっても感動した。
- ・保健室のモデルは重要である。
- ・足底の写真を撮影して土踏まずの形成状態を健康の指標とするのは，とても新しいアプローチである。
- ・国家規模の統計調査は，年齢による違いを見つけるために重要である。
- ・微生物学実習の寒天培地による手指汚染テストが興味深かった。
- ・講義を行う教員と受講する学生の関係が良かった。
- ・学生は，いつも笑顔でとても楽しそうだった。彼らは，天職として養護教諭を選んでいると感じた。
- ・学生ともっと話しをしたかったが，言葉の違いのためにあまりコミュニケーションをとることが出来な

(写真あり)

図3 学校保健演習（足底写真撮影の体験）

かった。

一方，研修員が授業を見学することに対してどのように学生が感じたかは以下の通りであった。

- ・実際にどのようなことをどのような環境で学んでいるのかを直接見て，知ってもらうことで，研修員の自国の教育現場で役立ててもらえたり，参考にしてもらえたりすることにつながると思うのでよいと思った。
- ・日本の養護教諭養成課程の学生がどのようなことを学んでいるのかを知ってもらうことで，何かの役に立てれば嬉しい。
- ・養護教諭のような専門職がない途上国で，どのように教育を行っていくのか少しでも参考になればよいと思った。
- ・研修員と一緒に実験や実習をする機会があればもっと親しくなれたと思った。もっと交流する時間が欲しかった。
- ・いつもとは，違う雰囲気の授業になり，私たちにとってもいい刺激になった。
- ・養護教諭としてだけではなく，人として学べることもあり，よい機会になったと思った。
- ・研修員に説明をしたいと思って言葉の壁があり，学習している内容や意義が十分に伝わったか疑問に思った。

(写真あり)

図4 微生物学実習（手指汚染テストの見学）

表3「健康観察/救急処置」研修内容

1. ヘルスプロモーション
2. 健康観察
 - 1) 健康観察の目的
 - 2) 健康観察の方法・内容
 - 3) 健康手帳
3. 標準予防策
4. 救急処置
 - 1) 学校における救急処置のあり方
 - 2) 救急体制等
 - 3) 一次救命処置
 - 4) 応急手当
5. その他

また、「健康観察/救急処置」研修(図5, 図6)に関する研修員の学びは、以下の通りであった。

- ・この講義で養護教諭の仕事に対する理解が深まった。
- ・健康観察のポイントは、子どもの世話をする時のポイントを示していた。
- ・母子健康手帳や幼稚園の出席ノート、学校の健康手帳、健康管理カード、欠席調査と健康観察表、緊急連絡カード等が参考になった。
- ・手洗いの歌の替え歌が参考になった。
- ・今回の講義で救急処置の大切さを理解することができた。
- ・自国の小学校の救急箱の中身をより良くするために変更中であり、今回救急処置について学べて良い機会になった。
- ・どのように他人を助け、支援できるかを教育することは、児童生徒に対する効果的なメッセージである。
- ・今回の講義で特に理論と実践の重要なポイントを学んだ。自国でも学校保健を実践していきたい。



図5「健康観察/救急処置」講義



図6「健康観察/救急処置」演習

- ・自国で学校保健システムを導入していくためにベストを尽くすモチベーションが上がった。「小さなことから始めて、大きなものに成し遂げていくことは可能です！」
- ・救急処置の演習をしていて、私自身の看護学生時代のことを思い出して楽しかった。
- ・教員の学生に対する情熱と献身は明らかで、とても素晴らしく感動的だった。

IV. 考 察

学校保健セミナー2008¹⁾では、途上国の研修員から自国の学校保健の現状を中心に研修員の職位・職務、学校保健に関する取り組みの展望、研修に対する期待等について報告してもらい、学生たちは、大きな衝撃を受けていた。途上国では、学校保健(保健室の併設、衛生教育、HIV/AIDS教育等の実施、子どもの健康管理、安全な水の確保、学校給食等)の取り組みが十分でなく、子どもの健康が脅かされている現状を理解した。途上国の学校保健の現状を理解しながら、学生自身のおかれた環境を振り返って自分自身の役割や課題について考え、さらに国際保健医療分野における日本の役割²⁾についても考察していた。このようなセミナーに参加することは、養護教諭を目指す学生にとって日本国内の学校保健に向いていた視点を世界にも広げ、よりグローバルな視野から児童生徒の健康や養護教諭の役割等について考察するよい機会になったと考える。

また、今年度新たに組み入れた学部学生の授業の見学は、日本の養護教諭成立の歴史や養護教諭養成の歴史とカリキュラムの講義等を受講した研修員にとって、養護教諭の養成の実際を目の当たりにすることでより実感をもって理解することが出来たと考える。さらに学生にとっても授業を見学してもらうことで、研修員の参考になり、役に立つことを嬉しく思っており、学生にもよい刺激になったと考える。言葉の壁について研修員、学生の双方が残念に思っており、いかにコミュニケーションをとるかが今後の課題である。

一方、筆者が担当した「健康観察/救急処置」研修は、途上国の学校現場における学校保健の課題に対応した研修ができるように表3に示すプログラムを企画して実施した。筆者は平成19年3月にJICA 集団型研修「学校保健」コースのフォローアップ調査³⁾に同行し、視察したザンビアとラオスの二国に共通する学校現場における学校保健の課題として、安全な飲料水の確保、トイレの使用と十分な手洗い、日常的な健康観察、救急処置、教室等の環境整備を指摘し⁴⁾、今回の研修ではこれらの課題に対する対応策を中心に教授した。

まず第一にヘルスプロモーションの考え方について確認した。人々の健康の保持増進のためには、感染症が蔓延している途上国においては、上下水道、トイレの整備等の生活環境の改善や予防接種の実施等が社会的な健康水準の向上につながり、個人の健康レベルの向上に結びつく。学校においても健康の保持増進が学力向上の基盤として必要不可欠であること等を教授した。湯浅ら⁵⁾が途上国における健康の改善は教育の向上につながり、教育の改善は健康の向上に寄与するという双方向的関係が健康と教育にはあると述べているように、教科教育の基礎として児童生徒の健康の保持増進（ヘルスプロモーション）を位置づけて、学校教育の教育目標の最優先課題として取り組む体制づくりが重要と考える。WHO アフリカ地域事務局は統合型学校保健政策（FRESH）を2000年から開始し、健康に関する学校政策の立案、健康的な学びの環境を創造する初段階として安全な水と衛生トイレの施設設置、技術取得を重視した健康教育、学校における保健医療および栄養サービスの提供を推進している。2000年に開催された「世界教育フォーラム」においても学校における保健・衛生・栄養の推進が「すべての人に教育を！（Education For All）」を達成するための重要な戦略の一つであることが確認された。

次にふだんの健康観察のポイントと重要性について教授した。児童生徒のふだんの健康状態、成長発達や栄養状態、病気やけがの発生等を継続的に観察して評価することは、異常の早期発見早期対応につながることで記録に残して変化を観察することで感染症の予防に役立つこと、健康手帳や健康管理カード、出欠調査と健康観察表等のツールを紹介し、研修員の感想からそれらの観察ポイントやツールが参考になったことが分かった。

さらに米国疾病管理予防センター（CDC）が推奨している病院感染対策の基本的な方法である標準予防策の考え方について説明した後で、救急処置について教授した。城川は、安全でない水、不適切なトイレ、整備されていない環境衛生等は貧困においてもっとも一般的な疾病リスクであると述べている⁶⁾。本研修でも清潔で安全な飲料水の確保のために、身近にある川の

水や井戸水を利用する場合には、一手間かけて「煮沸」することが大切であることやキャップつき容器に入れておくことを確認した。また、清潔で安全な飲料水は、けがや傷口の手当の時にも使用できること、標準予防策の考え方が感染症の予防上重要であることから、まず第一に手洗いが重要であることも研修で確認した。そして、救急処置については、特別な衛生材料がない場合でもまずは、清潔で安全な水で傷口等を十分に洗い流すこと、洗って干した清潔な布で止血や傷口の保護をすること、そして汗以外の全ての体液は感染の可能性があるものとして取り扱うことを確認した。大人は、不潔な環境に慣れており、貧困もあるので、行動変容するのは難しい。しかし、子どもは自分を清潔に保つこと、安全な水を飲むことなど、教育すれば変わる可能性がある。その教育を受けた子どもたちが大人になれば、社会も変わるだろうと途上国の医療行政官が話していたと野澤⁷⁾は報告している。今回の研修員の感想にも「小さなことから始めて、大きなものに成し遂げていくことは可能です！」とあるように地道に子どもたちに教育することで子どもたちの意識が変化し、行動変容に結びつき、さらに家族や地域の人々にも適切な健康行動の習慣化を広げていく契機になると考える。まずは、現状の中で一つずつ出来ることから改善するように取り組むことが重要であり、今回の研修がその取り組みの中心となる研修員のモチベーションの向上に少しは寄与したのではないかと考える。

日本の保健医療の経験は、保健医療の格差をいかにして克服し、貧困から抜け出すかという良いモデルであり、公衆衛生学的な手法の有効性を示すものである。自らの経験を活かして国際協力を強化することが要請されていると島尾ら^{8,9)}は述べており、学校保健を含めて現状の日本の衛生水準に至るまでのプロセスについて研修員に学んでもらうことは、自国の学校保健の改善策を計画する上で参考になると考える。またその計画策定の際には、大西¹⁰⁾が紹介しているPCM手法による計画立案・実施・評価のプロセスを踏まえると国際保健医療活動の現場でプロジェクトを運営管理する際に重要であると思われる。

．おわりに

上原¹¹⁾は、途上国の研修員や留学生の受け入れ、国際協力の実務に従事する職業専門家の育成等に貢献する役割を大学は果たすべきであると述べている。昨年度の研修を通して、個人レベルではなく、各専門領域の講座や大学組織全体として貢献できる体制づくりが重要であることが分かり、今年度は、講座全体の協力を得ながら研修プログラムを企画し実施した。「健康観察/救急処置」研修における学びに加えて、本学養護教諭養成課程の授業見学を通して養護教諭養成の実

際について研修員が知る機会になった。一方、研修員の報告から途上国の学校保健の現状について学生が学ぶことが出来、今回の JICA「学校保健」研修を通して双方向の学習の機会になった。今後は、今回の取り組みを基盤に研修の時期、内容をさらに厳選して、より研修員と学生の双方にとって充実した学習の機会になるように創意工夫したい。

謝 辞

今回の研修でお世話になりましたあいち小児保健医療総合センター山崎嘉久氏、JICA 中部国際センター相葉学氏、吉田智香氏、JICE 山本久子氏そして養護教育講座の先生方のご協力を深謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 宮城島一明, 中原俊隆: 国際保健医療協力の視点, 公衆衛生, 66 (4), 232-238, 2002
- 2) 山本太郎: ODA を通じた保健医療分野における日本の国際協力, 保健の科学, 47 (10), 740-744, 2005
- 3) 相葉学, 山崎嘉久, 藤井千恵, 野田典江: 平成18年度集団

- 研修「学校保健」フォローアップ調査報告書, 独立行政法人国際協力機構中部国際センター, 1-156, 2007
- 4) 藤井千恵: 途上国における学校保健の現状と研修員受入事業への提言 独立行政法人国際協力機構 (JICA) 主催平成18年度集団研修「学校保健」フォローアップ調査から, 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), 57, 45-53, 2008
 - 5) 湯浅資之, 中原俊隆: ヘルスプロモーション戦略に基づく統合型学校保健政策 (FRESH), 公衆衛生, 70 (11), 900-904, 2006
 - 6) 城川美佳: 「命の水」獲得活動の国際10年, 2005~2015, 保健の科学, 47 (10), 753-758, 2005
 - 7) 野澤幸江: 子どもたちの行動変容をめざして, 保健婦雑誌, 58 (11), 938-944, 2002
 - 8) 島尾忠男, 石井明: 公衆衛生学と国際保健医療学, 日本公衆衛生雑誌, 49 (1), 3-5, 2002
 - 9) 石井明: なぜ国際保健医療学なのか? 何が問題なのか?, 保健の科学, 47 (10), 700-705, 2005
 - 10) 大西真由美: 国際保健医療協力と計画・評価, 保健婦雑誌, 58 (11), 966-973, 2002
 - 11) 上原鳴夫: 国際協力における大学の役割, 公衆衛生, 66 (4), 248-251, 2002

(2008年 9月17日受理)